5．学生スタッフのボランティア企画・広報企画

センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達へ向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフが中心となって提供しています。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

また、学内においてもボランティアや社会課題を広く学生に知ってもらうための広報や啓発活動も学生スタッフが主体となって取り組んでいます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、地域でのイベントなども中止となり、昨年同様対面での活動が制限される状況が続きました。そのような中、学生スタッフは今何ができるかを考え、動画作成やSNSを利用した情報発信や、状況が許す際には対面での企画も感染症対策を最大限行いながら実施しました。

事　業　名	Volustagram　～学スタと、ちょっと社会を考えよう～（深草龍谷祭代替企画）
日　　程	2021年11月15日（月）～11月26日（金）（土日祝を除く）11時00分～16時45分
場　　所	龍谷大学深草キャンパス ボランティアセンター内、 成就館１階スクエア１（11/15～11/19）
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）
企画メンバー	安本大輝（法学4）　早川歩伽（文学3）　濵田　葵（文学3）　永野凌平（経営3） 谷垣俊弥（法学3）　竹内祐人（法学3）　喜多真央（文学2）　井関萌乃（文学2） 崇田ゆきの（文学2）　岡　智浩（文学2）　岡田祐依（経済2）　大原健太郎（経営2） 宗森公希（法学2）　西上和希（法学2）　伊野涼雅（短大2）　山下陽菜乃（文学1） 神月麻伽（文学1）　馬塲康世（文学1）　小木曽圭太（経済1）　水口璃々佳（経済1） 影裡天音（経営1）　小倉未椰（経営1）

1．経緯・目的

今年度の深草キャンパスの龍谷祭はオンライン開催となった（学生団体のオンライン参加は不可）。そのため代替案としてボランティア・NPO活動センター（以下ボラセン）において展示を開催する。

開催における目的は新型コロナウイルスの影響によりボランティアを知る機会が減少した中で、龍谷大学の学生がボランティア、社会問題に興味を持ち、今後ボラセンに足を運ぶきっかけを作ることである。今年度はこの目標を達成するために展示を行なった。

2．概　要

①テーマ

展示『Volustagram～学スタと、ちょっと社会を考えよう～』

展示タイトルにあるようにインスタグラムの様に見やすく、興味を引くことができる展示をイメージして展示物の製作を進めた。

②展示期間・場所

・11/15（月）～19（金）

⇒スクエア1（ボラセン紹介）、ボラセン内（社会問題）の２か箇所で実施。

・11/22（月）～26（金）

⇒ボラセン内にて全ての展示を実施。

※毎時間２～３名で来室者対応。

③広報

・Twitter投稿

展示開始５日前より計12回ツイート投稿

・チラシ配りによる広報

11/16（火）よりキャンパス内で開始

・立て看板の設置

キャリアセンター前、東門側

・ポスター掲示

樹林前・教務課前・２号館・22号館・和顔館

④展示内容

・ボラセン紹介（模造紙・動画）

「コロナ禍でボラセンは何をしてきたか」をテーマに、オンラインで活動してきた内容についてまとめた。

・社会問題紹介（模造紙）

福祉（障がい者）・環境（海洋汚染と放置竹林）・災害（防災・ハザードマップ）の３分野テーマに、ボランティア活動に関連した内容にまとめた。

3. 参加者の声・得られた効果など

・総来場者数　35名（アンケート回答22名）

・動画視聴回数　36回（アンケート回答７名）

※ Google フォームを利用して５段階にて集計。

・得られた感想

（動画）

・字幕があればよい

・傘貸し出しの存在を知ることができたが、なぜそのような活動をしているのかの説明も知りたいと感じた

・短くシンプルでわかりやすい

・注目のボランティアを発信してほしい

（展示）

・ボランティアの魅力を感じることができた

・展示に伴った実経験の内容があまり分厚く説明できていないように感じた

・ハザードマップの情報量を多くした方が良かった

今回の展示の満足度については全ての回答者が4以上と回答し、満足度は総じて高かった。またボラセンに行ってみたいという回答が全体の７割に達した。合わせて社会問題について興味をもてたかという問いには全ての回答者が４以上と回答があり、当初の目的が概ね達成したと考える。

4. 学んだこと・今後の課題

・展示について来室者から高い評価を得ることができたが、集客があまりうまくいかなかった。
その原因として、広報が不足していたので、より早い段階からチラシ配り等を強化すべきだった。
チラシには開催場所の地図を入れるとよいと感じた。

・展示物のレイアウトについて、来室者の立場に立って展示内容を見返す必要があった。

・学生スタッフ向けに用意したマニュアルが分かりにくかったため、書式を統一し、要点をしぼった内容にする。また来室者対応を向上させるために模擬説明の時間を学生スタッフ内で設けるべきであった。

〈報告者：岡田 祐依〉

事　業　名	2021年度　龍谷祭（瀬田）
日　　時	2021年10月30日（土）～10月31日（日）
場　　所	オンライン（YouTube）
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
企画メンバー（学生スタッフ）	朝野健太（社会3）　片岡克望（社会2）　谷垣美幸（農学2）　中山美代子（農学2） 鳴海彩紀（農学2）　松村優輝（農学2）　美野田愛（農学2）　小上馬怜美（農学1）

1. 経緯・目的

昨年度はコロナ禍で中止となった龍谷祭だが、今年度は感染対策を講じて動画配信のみで実施されることになった。そのため、この機会にボランティアや社会課題について視聴者に知ってもらうための動画配信を行った。

動画の構成とそれぞれの目的は以下の通り。

(1)「ボラセンの概要やボランティアについて」

ボラセンの取り組みや、どんなボランティアがあるのかを知ってもらう。

(2)「大津祭」

瀬田キャンパスの学生スタッフが2019年度までボランティア企画として実施してきた大津祭ボランティアだが、コロナによって 2 年連続曳山巡行が中止になり、祭への関心が少なくなってしまっているかもしれない。しかし学生スタッフとしてはこれからも関わり続けたいと考えているため、大津祭の文化継承や大津祭ボランティアの周知ということを伝える。

(3)「身近なところから SDGs」

年々話題になってきている SDGs について関心を持ってもらうきっかけにする。

2. 概　要

(1)「ボラセンの概要やボランティアについて」

ボランティア・NPO 活動センター（以下：センター）の概要や、ボランティア入門講座についてスライドを用いて紹介した後、学生スタッフのボランティア経験をインタビュー形式で語る方式にした。その後、夏休みに参加したボランティアについて、展示用模造紙を見せながら説明するという流れにした。

紹介したボランティアの種類は、子ども食堂、ボッチャ、棚田整備活動、BBS、認知症高齢者グループホーム、放課後等デイサービスである。

(2) 大津祭の歴史について、お囃子を BGM にして説明した後、大津祭ボランティアの企画リーダーを務めた学生スタッフから、その魅力をインタビュー形式で話す構成にした。

(3) SDGs 全体の概要説明の後、17のゴールからいくつかを抜粋し、雇用 / 労働、環境、人権の 3 テーマに分けて、その背景やそれらのゴールに関わる取り組みなどをまとめた動画構成にした。

3. 参加者の声・得られた効果など

Google フォームでアンケートを実施し、下記のような声が得られた。良い意見ももらえたが、私たち自身今後の課題として考えたことも視聴者側からの意見としても出ていた。

以下、アンケートより抜粋。

・SDGs について色んな視点で説明されていて面白かった。もう少し突っ込んで考えて自分たちの意見とか、自分たちはどんなことを実践しているのか等のコメントが聞きたかった
・熱意が伝わった。
・ボランティアに行くことで色んな経験ができ、同時に学べることもたくさんあると感じた。
・全体的にもう少し短い動画だと見る側としてはありがたかった。

4. 学んだこと・今後の課題

・動画編集技術の入口を学んだ。
・あらかじめオンラインになった場合にどうするかを話し合っておくなど、事前の準備がかなり大切になってくるのだと知った。
・今回は PR の方法として Twitter にしか取り組めなかったため、龍谷祭動画を出していることを知っている学生が少なかったのではないかと思う。今後動画を配信する際は、効果的な PR 方法を考える必要がある。
・本来の龍谷祭企画は学生スタッフ全員で作業するものだが、今回は企画メンバー以外の学生スタッフの巻き込みは動画出演と展示用模造紙の作成のみに留まった。また、動画はパソコンで完結させる作業が多いので、企画メンバー全員で作ったという感じがあまりせず、一部の人に負担が多くなった。全体に作業を振り分ければよかった。
・視聴してもらうために、1時間半超えの動画は長すぎたので、動画を何本かに分けるなどの方法をとればまた評価は変わっていたのかもしれないと感じる。あらかじめ構成と各時間などを細かく決めていれば良かった。

〈報告者：谷垣 美幸〉

事　業　名	ボッチャを知ろう！やってみよう！　ボッチャ体験会（瀬田）
日　　時	2021年11月27日（土）13時30分～15時30分
場　　所	瀬田キャンパス　青雲館食堂
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
参加人数	15名
企画メンバー	大屋晴太郎（農学4）　渡中新太郎（農学4）　一色剛滉（社会3） 中山美代子（農学2）　美野田愛（農学2）　川口克基（社会1）

1. 経緯・目的

東京2020オリンピック・パラリンピックが開催され、日本中がアスリートの活躍に沸いた。特に、日本で開催されたことにより、これまで知名度の低かったパラリンピック競技にも大きな注目が集まった。そこで、身近な地域にも障がい者スポーツに取り組んでいる人々の存在を広めることで、共生社会を考えるきっかけを作ることを目的にイベントを実施する。本企画では、パラリンピック競技の中でも、障がいの程度が重い人のために考案されたボッチャを取り上げ、体験会及び選手との交流会を開催する。ボッチャの一番の魅力は、障がいの有無に関係なく、誰もが対等に勝負できる所にある。垣根無くできるスポーツであるからこそ、本イベントを誰もが輝ける共生社会を作る第一歩とすると同時に、ボッチャの知名度向上を図り、地域社会の貢献に繋げる。

2. 概　要

〇当日までの動き

10月中旬～10月末

・体験日時を決定
・広報用のチラシと参加申し込み用の Google フォームの作成
・当日までの計画表を作成

11月上旬

・体験当日のプログラムの作成
・体験申し込みの返信用メール定型文と当日の詳細

連絡のためのメール定型文を作成

11月中旬

・体験後アンケートの質問項目の決定

・Google フォームの完成

11月26日（体験前日）

・瀬田の学生スタッフミーティングの後、会場設営を実施

〇広報

・主に、立て看板、チラシ、ポスター、Twitter、ポータルサイト、チラシ配り、授業広報を実施。

・その他、センターの来室者への宣伝、ボッチャについての動画の作成をおこなった。

〇当日のプログラム

13：00　受付開始

13：30　体験開始・説明

14：10　競技体験

　　手投げ・ランプ【交代制】

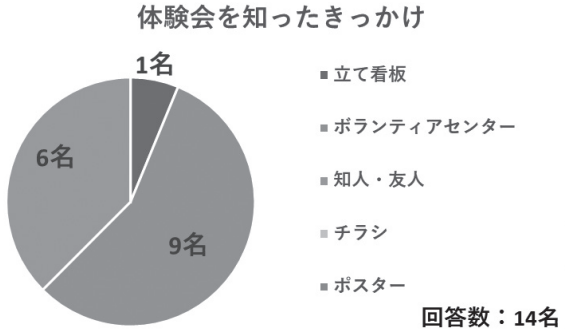
15：00　交流会

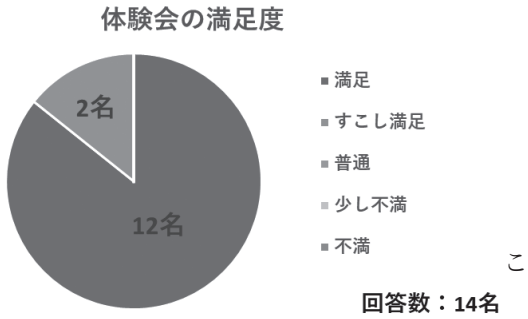
15：30　体験終了

「ボッチャ体験の様子①」

3. 参加者の声・得られた効果など

〇満足度と参加のきっかけ





こ

・体験会を知ったきっかけとして、ボラセンが一番多かった。その次に、知人・友人を通して知った人が多かった。

〇参加者の感想

・ルールは簡単だが微妙な力加減や戦略が難しく、奥が深い競技だと感じた。どこに投げればどう動くのか、どこに投げたら相手が嫌がるのか、戦略と想像力がとてもいるスポーツだと思った。

・どの選手も自分の障がいやハンディキャップをマイナスで捉えることをせず、様々な人と一緒になって競技を楽しんでいらっしゃり、自分もボランティアに参加したくなった。

・障がいを持つ方と直接関わる機会が今までなかったので貴重な時間だった。交流会ではボッチャに関する質問が多かったが、そこからボッチャの魅力だけでなく障がいを持つ方の苦労やその人なりの考えなどを知ることができた。

〇障がい者スポーツに対するイメージの変化

・障がい者スポーツは、障がいのある方だけでしかできないという印象だったが、ボッチャを通して、健常者とも一緒にできるスポーツもあると知ることができた。障がいのある方とでも対等に勝負できるという事にとても魅力を感じた。

・人によって障がいの種類や程度が異なるが、選手ひとりひとりが工夫をして、色々な方法でプレーするのだと知った。

・ 障がい者スポーツと聞くと障がいを持つ人がするスポーツという認識だったが、サポートなど

選手との交流会の様子

で障がいを持つ人以外も関わることができると知った。

4. 学んだこと・今後の課題

・会場設営・撤去に関しては、コア以外のメンバーが協力してくれたおかげでスムーズに進んだので良かった。ただ、机の向き等で戸惑うことがあったため、元の形をしっかり記録しておくことが大事だと学んだ。
・一番の課題は、学生スタッフ以外の参加者が少なかったことだ。本来は一般学生にこそ参加してほしい企画であったため、とても残念だ。参加者を増やすために、授業前広報の回数を増やす（特に教職関連の授業）、当日参加 OK にして受付を外に出し、飛び入り参加しやすくするなどの改善点が挙げられる。
・事前アンケートの回答率が低かったことも今後の課題だ。申し込みフォームのメールアドレス欄を「よく見るメールアドレス」にする、もしくは、体験会の参加申し込み項目の中に、アンケートも入れておくようにするべきだった。また、当日にアンケート回答を催促する予定だったがバタバタしてできなかったため、企画メンバーを増やしたり打ち合わせを念入りにすればよかったと感じている。

〈報告者：大屋 晴太郎〉

事　業　名	大津祭関連企画　大津祭広報活動（瀬田）
期　　間	2021年 8 月～2022年 3 月
場　　所	ボランティア・NPO 活動センター／大津祭曳山展示館
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）
企画メンバー	赤木宏斗（社会4）　土肥亮太（社会4）　朝野健太（社会3）　一色剛滉（社会3） 吉岡秀太（社会3）　李　鵬祥（社会2）　谷垣美幸（農学2）　鳴海彩紀（農学2） 平石陽菜乃（農学2）　松村優輝（農学2）　池本結希菜（社会1）　川口克基（社会1） 成川雅妃（社会1）

1. 経緯・目的

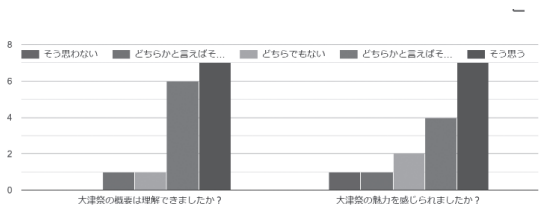
・国の重要無形民俗文化財に指定された大津祭を龍谷大学生に広く知らせることで、大学がある大津の伝統文化に触れるとともに、伝統文化継承の重要性についての理解を深める。
・企画メンバーの大津祭についての知識向上を図り、一般学生に大津祭の魅力を広く伝える。
・コロナ禍で中止となった大津祭の伝統を絶やさないために広報活動を行い、来年度の大津祭のボランティア参加につなげる。
・大津祭について知ることを通して、私たちのキャンパスがある大津市の魅力について知り、発信する。

以上 4 つのことを目的として活動を行った。

2. 概　要

（1）龍谷祭での展示

当初は龍谷祭が開催される予定だったため、曳山の模型や大津祭を紹介するポスター等の展示を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染状況悪化により、龍谷祭がオンラインでの開催へと変更されたため、大津祭ボランティアについて、3 分間程度の PR 動画を作成し、公開した。動画視聴者アンケートの結果は以下の通り。



（2）Twitter 投稿

写真などを用い、龍谷大学生に大津祭についての情報を発信することを目的に、週 1 回程度の更新で 8 月の第 2 週～10月の第 2 週までの計 5 回の更新を予定していた。しかし、前述した龍谷祭の開催形態変更への対応に追われ、予定通りの実行とは至らなかった。結果、11月の第 2 週～ 1 月の第 4 週まで（1 月の第 1 、 2 、 3 週は未実施）の計 9 回の投稿に増やして発信した。以下の表は各投稿のインプレッション数である。

日　付	11/9	11/16	11/23	11/30	12/7
インプレッション数	1052	4766	894	822	897
日　付	12/14	12/21	1/18	1/26	
インプレッション数	874	800	869	838	

（3）勉強会

勉強会は、企画メンバーや学生スタッフの大津祭に対する造詣を深める目的で行い、大津祭曳山展示館に訪問した。当初訪問を予定していた９月上旬に、新型コロナウイルスの感染状況悪化により大学の活動制限レベルが引き上げられたことから、12月12日に日程を変更した。感染予防の観点から、参加者はコアメンバーに限り、人数を絞ったうえで行った。当日は大津祭の歴史や、それぞれの曳山にどのような意味があるのか等を大津祭曳山連盟の方から説明を受けながら見学した。

（4）壁新聞制作

勉強会にて、大津祭曳山連盟が来年度のボランティア参加の減少を危惧されていたことを受け、当初予定していた巡行ルート MAP づくりから変更し、龍谷大学生に大津祭ボランティアへの参加を促す壁新聞を制作した。春休み期間に制作したため、来年度以降にエキシビションへの展示や新歓での企画説明の際などでの活用を予定している。

3. 本企画の成果や今後の課題

（1）龍谷祭での展示

・大津祭の魅力を改めて理解することができた。
・龍谷祭の急な開催形態の変更にも迅速に対応することができた。
・視聴者アンケートについても、概ね高評価となり、大津祭の存在を認知してもらい、興味を持ってもらうという狙い通りの反応を得ることができた。

（2）Twitter 投稿

・更新日や原稿の締め切り日をしっかりと決めていたため、コロナでのイレギュラーはあったものの、概ね予定通りに更新を行えた。
・毎回、Twitter 投稿を担当する人が違ったため、それぞれの文体が統一されていなかった。手分けして原稿を書く場合は、投稿する前に、誰かが文体を統一する等の校閲を行うべきだった。
・目標としていたインプレッション数2000以上が達成できたのは１回だけだった。次回行う際は、企画メンバーがもっと Twitter 更新に関して他の学スタに告知したり、自らいいねやリツイートを行うなどすれば目標達成に大きく近づくと思う。

（3）勉強会

・実際に大津祭の運営に深く関わっている大津祭曳山連盟の方から直接お話を聞くことができた。大津祭に対する理解が深まっただけでなく、展示見学だけでは読み取れない、コロナ禍での大津祭の中止を曳山連盟の方々がどう受け止め、何を思っておられるのかということを知るとても良い機会となった。

（4）壁新聞制作

・勉強会で大津祭曳山連盟の方から聞いた話を受けて、自分たちに何ができるかを考え、柔軟に企画内容の変更を行えたことはよかった。

〈報告者：髙橋 慶多〉

事　業　名	深草ふれあいオンライン2021（深草）
日　　時	2021年12月21日より公開
場　　所	深草ふれあいオンライン（https://fukakusafureai.com）
実施主体	深草ふれあい事業実行委員会
企画メンバー（学生スタッフ）	団体紹介動画：黒崎雄太（経済4）　竹内祐人（法学3）　早川歩伽（文学3） 榎　海斗（法学1） パフォーマンス動画：神田瑞季（経済4）　園原　聖（法学3）　岡　智浩（文学2） 松本裕生（政策2）　奥田真史（政策1）

1. 経緯・目的

今年度は新型コロナウイルスの影響により「深草ふれあいプラザ」は開催されなかった。その代替として、深草ふれあい事業実行委員会では、コロナ禍で希薄化する地域の絆や魅力を再認識し、深草に住み続けたいという思いを持ってもらうことを目的としたホームページ「深草ふれあいオンライン」を開設することとした。ボランティア・NPO 活動センター（以下ボラセン）はふれあいプラザに参画している団体のため、そのホームページに掲載する団体紹介動画とパフォーマンス動画の制作の依頼を受けた。

動画制作においては、ボラセンの場所や機能について広報することを目的とした。

2. 概　要

パフォーマンス動画

「バカっこいい」をテーマとして動画を作成した。動画の内容は、YouTube に上がっている動画を参考に構成し、ペン渡し・ペン投げやペットボトル入れ、傘キャッチなどの技を動画内では用いた。

動画の完成までの期間は約 3 週間で、構成、撮影、編集はそれぞれ 1 週間程度かかった。

団体紹介動画

ボラセンについて紹介する動画を作成した。閲覧される方が龍大生ではなく一般の方であるため、学生スタッフの活動には焦点をあてず、ボラセン全般のことを画像やパワーポイントを用いて紹介することとした。

〈動画内容〉

①深草ふれあいプラザにおいてボラセン（学生スタッフ）が行ってきた活動の紹介
②ボラセンについての説明
③動画とテロップを用いての道案内
④ボランティアコーディネーター・学生スタッフについて紹介
⑤学生スタッフの来室者対応の様子及び説明
⑥学生スタッフによる企画・運営について
⑦団体さんへ向けた呼びかけ

動画の制作には 2 週間程度かかった。道案内は過去の動画を使用し、その他は新しく撮影をした。

3. 学んだこと・今後の課題

パフォーマンス動画

〇工夫点

・出演者の日程が合わないことが多かったため、カメラの角度を調整して出来るだけ違和感が無いように努めた。
・編集で効果音を使用し、カット割りで切り替わりの間をなくすなど、見やすい動画づくりを心掛けた。

〇学んだこと

・動画を作る際は、全体を通して違和感が無いように、服装・髪型・天気などに配慮することが大切だと分かった。

・背景に人が映ったりする場面があるので、場所や時間をあらかじめ決めておき、優先順位をつけて撮影に取り掛からないと、後々、慌てることになると感じた。

・人数が多すぎると日程が合わないため、期間に応じて人数を調整することが重要である。

〇今後の課題

・編集技術をもう少し向上し、多くの人が編集可能になれば、動画の質はより向上するのではないかと思った。

・演者の演技も動画に入り込みやすくするために大切なので、思い切って演技することが重要だと感じた。

団体紹介動画

〇工夫点

・テロップや字幕、画像の挿入をナレーションの読み上げに合わせるようにし見やすい動画になるよう心掛けた。

・紹介動画という内容上、説明が多く音声が重要であると考えたため BGM の音量やナレーションの読み方には注意を払った。

〇学んだこと

・編集ソフトを用いると音量のノイズキャンセリングだけでなく、パートごとの音量の変更や徐々に変化していくように調節できる。

・マスコット（着ぐるみ）の中に人が入っていることについて公共の場で言及してはいけない。

・ナレーションの読み上げに合わせて字幕を付ける作業と動画にあった BGM を探し出す作業には想像以上の時間と労力が必要となる。

〇今後の課題

・動画における BGM とその音量は非常に重要であり、今回の動画ではもっと改善の余地があると感じた。

・編集技術の向上…効果音の挿入、字幕 / テロップの色分け、字幕に背景をつける、etc.

〈報告者：榎 海斗〉